

第1499回（4月23日）

和子牛市場をめぐる牛肉経済の近年の 動向について

小林 弘 明

本稿では、①とくに近年における和子牛価格の形成がいかなる要因により説明し得るものなのか、②メス牛屠殺行動を生み出していると思われる繁殖農家の期待形成はどの程度の時間的タームでとらえ得るのか、を明らかにすることを目的として、第2節で既存の計量経済学的研究をサーベイし、第3および4節で上記2つの問題を、最近までの統計資料を解析することにより検討した。

分析に際しての前提は、和子牛市場における需要および枝肉市場へのメス牛の供給つまり淘汰は、基本的には、肥育農家および繁殖農家の期待収益により決定されるであろうということである。

第3節では、まず和子牛価格、和牛枝肉価格、肥育用飼料価格および和牛分娩頭数の動向に関する概括的な検討から、分析対象期間（1968年1月～90年12月）について全般的にみるならば、和子牛市場における需要と供給を規定すると考えられる和子牛価格以外の上記3変数は、特に前2者について、和子牛価格の形成にとって予想された役割をはたしたであろうことを明らかにした。しかしながら、特に近年の動向に着目した場合には、飼料価格の趨勢が、他の2変数に比較してより重要な役割をはたしたのではないかと考えられる。

次に第3節では、和子牛価格を上記3変数により説明する回帰分析を行ない、それをもとに要因分解分析を行なうことにより、以下の点を明らかにした。

イ) 80年頃を中心とする和子牛価格の上昇トレンドは、飼料価格の下落と枝肉価格の上昇の双方、特に後者により

ロ) 82年頃を中心とする下降トレンドは、飼料価格の上昇と枝肉価格の下落の双方、特

に後者により

ハ) 82年頃を中心とする上昇トレンドは、飼料価格の下降と枝肉価格の上昇の双方、特に前者により

それぞれもたらされたものとなる。また、

ニ) 90年初頭に約5年ぶりに下降トレンドに向かったとみられる和子牛価格の動向は、枝肉価格が短期的に下降トレンドを示したこととともに、飼料価格が上昇から下落に転じたことが作用している。

第4節では、メス牛屠殺頭数と何期か前の和子牛価格との負の相関関係がどの程度の期間にわたって確認できるかを明らかにすることにより、技術的制約条件と繁殖農家の期待形成とによって合成されるめす牛の屠殺というラグを伴った行動が、どの程度の時間的タームでとらえ得るかについて検討した。計測期間として72年1月～90年12月、72年1月～81年12月、82年1月～90年12月の3つを設定し、それぞれについて同様の計算を行なった。

その結果、子牛価格の変動に反応する繁殖農家によるメス牛の屠殺行動におけるラグの関係について、72～90年という分析期間の中で、後半の時期においてより強く、かつ長期の遅れを伴ったものとなっていることを明らかにした。